

『洪水かく乱』



芥川での洪水前（上）。出水3ヵ月後（下）を見ると、川の様子が変わったことがわかる。
撮影/芥川緑地資料館（あくあびあ芥川） 山本忠雄氏

洪水は高水とも書き、氾濫するかどうかによらず、大雨により増水することを言い、年に何回も起こっています。洪水時には流量が増えて水は濁り、水位は高く流れは速くなり、砂や草木、ゴミまで流れます。洪水かく乱とは増水によって生じる生物の生息場の物理的変化を言いますが、どんなものがあるのでしょうか？

水位が高くなると陸地が冠水します。洪水が終わると陸に戻るこのような場所を冠水帯と言い、生物にとって非常に重要な場所です。ヘビ類は生息地そのものですし、カメ類は生活する水域から産卵場である陸域への移動に利用します。魚類は出水時の避難場、出水後に生じる一時的な水域を産卵場として利用します。植物はタデ、ヨシなどの草本、ヤナギなどの樹木が冠水頻度や土壌に応じて棲み分けていますが、出水時の強い流れにより洗掘され支持力を失い、植物体自身に作用する水の力により植生は流されます。裸地は植生の流失、出水末期の埋め戻しが頻繁に行われることにより維持されます。冠水帯は洪水かく乱の賜物です。また、河床の砂礫は入れ替えられ、砂州の形を変え移動させます。礫表面の付着藻類も細かな砂により削られ、新たな藻類の生息場となります。洪水かく乱は水中や陸上の冠水帯に新鮮な、柔らかい生息場を新たに造り出しているのです。河川に生息する生物を特徴づける無くてはならない環境の変化であり、生じる面積は広いほど良く、また、様々の強さのものが何回も起きることが必要です。

大阪工業大学 教授 綾 史郎



来た・見た・聞いた

淀川雑記帳



まだ柴島干潟が再生実験場であった頃のお話。鳥寄せする方法を福岡の友達に教えてもらったので、さっそく調子にのって試してみた。九州では3回は挨拶で、5回は警戒を意味するとかで、カラスにも方言もあるらしい。「カーカー」と鳴きまねを繰り返す。すると、対岸からカラスが1羽、2羽と徐々に増えていき、10羽ほど集まってきて、頭上を旋回し出した。いったい私は何と声をかけたのだろうか。

さて、先日、笛奏者から聞いたお話。かつてのヨーロッパでは、飼っている小鳥を美しく鳴かせるために、笛の曲を聞かせていたらしい。ナイチンゲールの歌は、鳥用の曲だそう。きれいな音色を記憶させること=記録（Recode）に通じて、縦笛はリコーダーという名前になったとのこと。次の調査には、娘のリコーダーを持って行こうかな。あっ、その前に笛の練習せなアカンわ。（編集長・石山郁慧）



河川と環境の法律相談所

legal advice



特定外来生物は移動可能？

人を自然に近づける 川いい会 法務担当 弁護士 藤原 武士

子供の頃、オオクチバス・ライギョ・ブルーギルがたくさん釣れる池が近所にありました。今から考えると、昔、誰かが放流し、繁殖し増えていったのだと思います。外来生物法は特定外来生物の放流はもろんのこと、運搬も規制しています。近所の池や川まで運び、自由な放流を放置すれば、それまでの生態系が破壊されるからです。実際に関西では、オオクチバスを自動車で運搬していた人が、警察官の職務質問を受け、現行犯逮捕された事件もありました。現在、各自治体で、オオクチバス等の釣りあげた特定外来生物のキャッチアンドリリースを禁止する条例も増えてきており、特定外来生物が拡がることを防止する取り組みが進んでいます。環境や生物の生態系に配慮した新しいルールづくりがされようとしています。ルールの範囲内で、釣りも楽しみたいです。



デザイン監修：NPO法人nature works 泉野幸彦・ありさだあきよ
イラスト監修：NPO法人nature works 小村一也
取材協力：人を自然に近づける川いい会
発行支援：国土交通省 淀川河川事務所

バックナンバーは、<http://npo-natureworks.net/> の「無料の資料」からダウンロードできます。

淀川自然

2013年9月号

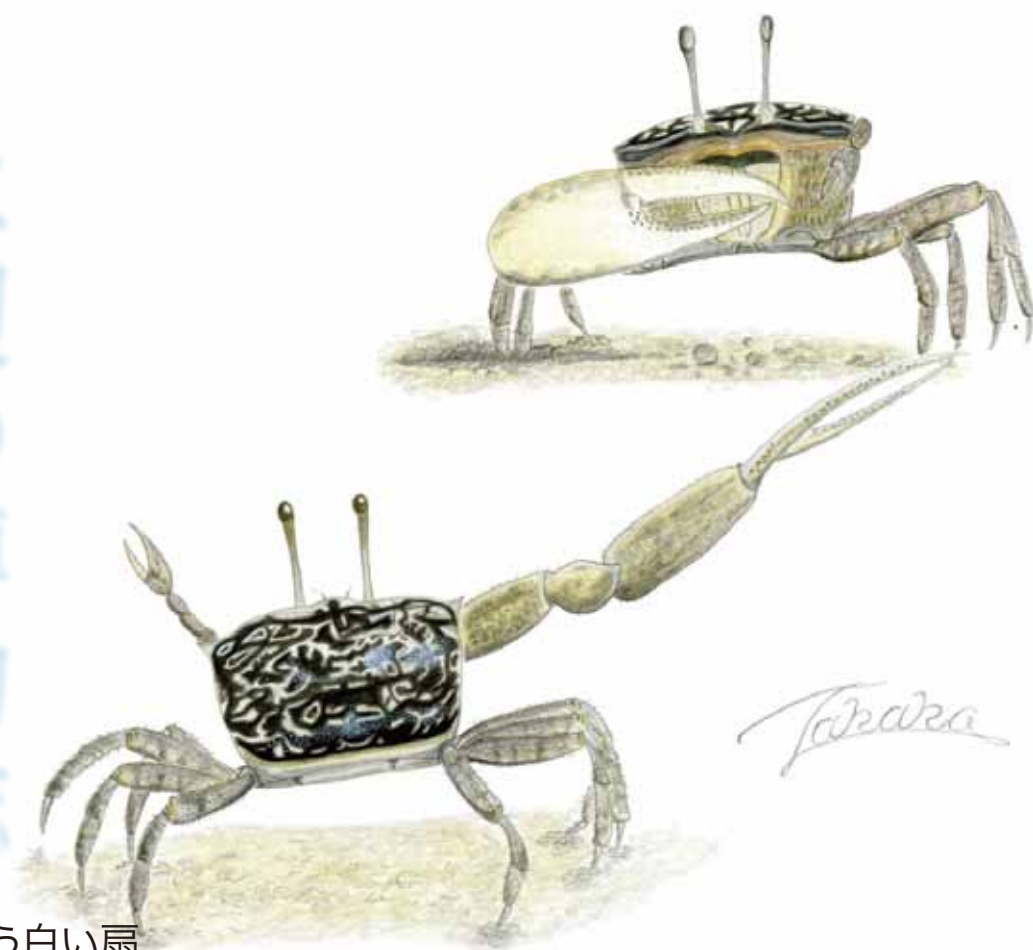
No.3

画報

淀川水系の生物多様性を見る・知る・楽しむ
生きもののシグナル

YODOGAWA
SHIZEN GAHO

水辺の博物誌



干潟に舞う白い扇

ハクセンシオマネキ *Uca lactea lactea*

十脚目スナガニ科・絶滅危惧種。初夏から夏の終わりまで、繁殖期のオスが大きな缺脚を振り上げる姿が見られます。この様が白い扇を振るように見えることが名前の由来です。大阪湾では近木川や男里川の河口が有名な生息域ですが、近年では海老江干潟にも定着しているようです。（画/岡田貴子）



発行責任者 淀川管内河川レンジャー・石山郁慧